八戸漁港における金属製および紙製魚箱の用途

四 津 隆 一

さきに著者は八戸・気仙沼・石巻・塩釜の4漁港の調査により、三陸主要漁港の製函業について報告し、原木の不足と木製魚箱代用材料の改良から、鮮魚容器の転換を予想したが、とくに木製魚箱生産に焦点をあてて論述した(四津1967)以後の地理学研究では著者の管見によると、魚箱生産に関する報告は見あたらない。従ってすでに発表した報告を補足する目的で、木製魚箱以外の魚箱について検討することとする。水揚量31万トン、漁獲額120億円(1967年)におよぶ八戸漁港では八戸漁港製函株式会社、八戸近海漁業協同組合、八戸市白銀漁業協同組合以外、一応製函業者は八戸港製函事業協同組合、八戸漁港鮫製函事業協同組合、八戸中央製函協同組合の3組合に統合され、他の漁港の製函業者よりも多数集中するとともに、はるかにまとまっている。1963年設立され、1967年鮫がうら湊町へ移転した株式会社八戸水産公社が、魚箱代金を漁業者から集めるなどの雑務を代行することにより、製函業者の企業の安全を図り、さらに10~11月の八戸港でイカ・サバの水揚げが集中・競合して木製魚箱が需要量におよばなくなる場合を考慮して、鮮魚用金属製魚箱を15万箱準備している。製造地は東京(日本魚函サービス株式会社)で、木製魚箱が漁港付近で生産されているのとは対照的である。1962年に金属製魚箱が使用され始めると同時に延55

万箱の使用という普及ぶりをその年に示したが、以後不評を買い年間16,000箱の使用にまで転落した(1964年)。1965年以降鮮魚金属魚箱は、北洋サケ・マス漁業に出漁した84隻の大部分に積み込まれたほか、サバの地元保管用を中心に延30万箱(1967年)が使われるようになり、一応流行的普及の段階を脱して、金属製魚箱の利点の再認識に基いて着実に利用されようとしている。一方他の木製魚箱の代用品として鮮魚用耐水ダンボール魚箱があげられる。これは1966年試験的に使用され始め、1967年にはサバの県外向けに12,000箱使われた。耐水ダンボール魚箱は金属製または木製魚箱の大部分とは異って、使用が一回限りである点で県外のような遠距離輸送に使用されているのである。

以上のように鮮魚の容器として木製魚箱を使用していたが、魚の種類により木製魚箱の不足の時期に、木製魚箱代用の金属製ないし耐水ダンボール魚箱が使用されている。そしてある程度それらの利用が軌道に乗りはじめたように考えられる。しかし鮮魚容器における木製魚箱の地位は他の追従を許さず、ここにあげた代用魚箱は木製魚箱にくらべれば九牛の一毛にすぎない。木製魚箱に関して近年宣伝される木材資源の払底に基づく原料難と代用魚箱の質的向上・コスト面の改善による普及が、影響をあたえているように予想されたが、現在はその萌芽を指摘できるにすぎない。(1968. 7. 27 受理)

四津隆一(1967): 三陸における主要漁港の製函業
東北地理 19 88~93

The Use of Metal and Cardboard Fish-cases in Hachinohe

Ryuichi YOTSU

In 1967, the author published an article on the wooden fish-cases in big fishing ports along the Sanriku coast. This is a report of the author's investigation on the use of metal and cardboard fish-cases in Hachinohe. The metal and cardboard cases are used to meet the shortage of the wooden cases in the season of large quantity of landing during the period from October to November. Such cases have been in use especially for mackerel since 1962.